

三河ひるわ山山論の展開

——私領山論の公儀越訴をめぐる——

はじめに

ひるわ山山論は、三河国田原藩領内の野田村と赤羽根村の間で起きた山論である。田原藩は現在の愛知県渥美半島に位置する一万二〇〇石の小藩である。山論の訴訟方である野田村は三河湾に面して位置する。村高は二七四石余、反別は田一五〇町余、畑八四町余である。田原藩領内の田の反別の合計は七〇六町余であるから、藩内有数の水田地帯であり、穀倉ともいべき村である。一方、相手方の赤羽根村は遠州灘（太平洋）に面している。村高は一四五石六升、反別は田四五町余、畑五九町余である。浮役高は九〇石、網役である。宝永二年（一七〇五）の網数は六二帖で、田原藩二四カ村のなかでも抜群の網数を有する

史苑（第五一巻第一号）

漁村という一面も持っている。

ひるわ山山論はこのような異なる立地条件にある野田村と赤羽根村が、村境にあるひるわ山をめぐる争ったものである。元来、ひるわ山ないしひるわ原は、赤羽根村の耕地の大部分と野田村の一部を含む、広い地域を指す地名であった。そのなかに野田村が訴訟の過程で論所として「野田ひるわ山」と呼んだ松山があり、その松山と赤羽根村の耕地が錯綜していたため、野田村と赤羽根村の間に対立を生じるようになったのである。この山をめぐる両村の争いは、寛文八年（一六六八）と同一三年の二回起きており、いずれもひるわ山の下草の採草権を争ったものとされている。

しかし、寛文一三年の山論のさいには、田原藩領内の村同士の争論ながら、野田村民のほぼ六カ月にわたる江戸での訴訟活動により、幕府の評定所での審問および裁許が実

藤井智鶴

三河ひるわ山論の展開（藤井）

現された。単なる刈敷肥料としての下草の採取地をめぐる争いだけで、果たして江戸出訴を行うだろうか。以下、野田村側の山論の記録である「ひるわ山出入覚書」⁽⁹⁾（以下、「出入覚書」と略記）に記された、野田村民の行動と訴願内容の分析を通して、私領内の山論でありながら野田村民があらえて幕府に越訴した理由と、その訴えが受理され裁許されるに至った過程を明らかにすることが、本論の目的である。

一、寛文八年の山論

寛文一三年の山論の前提として、まず、同八年の山論について触れる。この山論に関する史料は、赤羽根村の庄屋を務めた鈴木家に残された、六通の文書と「出入覚書」に記された記述のみである。山論の経過の詳細は不明であるが、(1)寛文八年正月赤羽根村が田原藩へ訴訟、(2)その裁決が下る、(3)翌九年七月に赤羽根村より裁決を不服として訴状を提出、(4)同年八月赤羽根村と野田村が対決し、裁決が下される、そのさいに野田村庄屋・山廻が入牢を命じられる、(5)同年九月庄屋・山廻赦免される、という経過をたどる。

(1)の赤羽根村の訴訟は「赤羽根村ゆう田畠之中嶋へ当村

之氏神引越申候ニ付、御奉行様方へ御断申上候⁽¹⁰⁾」という内容のものである。つまり、赤羽根村の氏神を「ゆう田畠之中嶋」へ移転したいということである。赤羽根村には夕・中夕・向夕・上夕・夕ヶ原という小字があり、そこには池もあることから、その池の中嶋へ氏神を移転しようとしたのであろう。田原藩はこの訴えを受理し、許可を与えた。赤羽根村の訴訟について、野田村は「出入覚書」で次のようにとらえている。

此ひるわ山出入と申ハ、六年跡申ノ正月、赤羽根百姓、野田ひるわ山之内龍ヶ原と申所ニ、新宮立度と申上候而、田原様御奉行を奉願、大勢もやういたし、野田ひるわ山江押込、御奉行衆宮地見積被遊候所、古来々野田村之山ニ御座候間、末代之こふくわいニ成候間、残念に存候故、差留メ候、すなわち、野田村は、赤羽根村が「野田ひるわ山之内龍ヶ原」に新宮を建てるために、藩の役人が宮地見積りをしようとしたので、差し止めたと主張している。

赤羽根村のいう「ゆう」が「野田ひるわ山之内龍ヶ原」に入るのかは明らかではないが、赤羽根村が氏神を移転しようとした場所が、野田村にとって「末代之こふくわい^(後梅)」ともなりかねないところだったことは確かであろう。

その龍ヶ原であるが、田原藩の「萬留書」⁽¹¹⁾にある寛文一

三年の野田村の訴状に、

都筑安心様と申御牢人、赤羽根村に居住候て、野田ひるわ山之内りうが原ニ新畑をかまい被成候刻、野田村百姓共出合、築地をこわし、おさへとめ申候時、戸田伊賀守様御家老中被仰候ハ、赤羽根村之百姓共の仕ニあらず、此牢人之儀ハ此方より新子を進之候間、重而加様ニかまい申候ハミ、急度被申付と、御しかり被成候、

とあることから、戸田伊賀守忠昌の時代(万治元〜寛文四)にすでに開発に着手していたことがわかる。これにより、この龍ヶ原に氏神を移転、あるいは野田村がいうように新宮を建立することの意味は大きくなる。新田開発に伴い成立した新村・枝郷に神社を勧請することは顕著であった(『国史大辞典』)から、龍ヶ原の内に枝郷ないしは新村が成立しつづかつて神社を建立しようとしたと考えられる。それくらい開発は進められていたといえる。

赤羽根村の氏神移転は野田村の実力行使および提訴により中止となり、その後の審理を経て裁決が下された。その内容は不明であるが、翌九年七月にこの裁決を不服とする赤羽根村が提訴した。その訴状に、

此度、前々之通と仰付御座候上ハ、野田村ハ山之しよむ仕候ハミ、赤羽根村の田地付とて六ヶ敷可有之、

史苑(第五一巻第一号)

とあることから、「前々之通」に野田村が「山之しよむ」すなわちひるわ山を管理し年貢を負担する、という内容の裁決であったと思われる。また、赤羽根村の別の訴状には、

野田村之者御代官衆へ申上候ハ、赤羽根村之新子きり申候をとめ申候由、申上候、

ともある。この史料中の「新子」は「あらこ」と読み、ほかの箇所でも「新田新畠当御代迄新子きり申候」とあることから、新しく開墾した場所を意味すると思われる。野田村は寛文八年の対決のさいに赤羽根村のひるわ山における「新子きり」―開墾の停止を訴え、それが聞き届けられた内容の裁決となったと推察される。要するに、寛文八年の裁決は野田村のひるわ山利用を優先するものであったため、赤羽根村側より提訴したのである。

寛文九年八月に下された裁決の詳細も不明である。寛文一三年の山論では、この裁決について、野田村・赤羽根村ともに「如前々被仰付候」としている。

この対決の後、野田村庄屋と山廻が、「野田村之者共、山手米かくし置申候申分、罷成不申候」という理由で、入牢を命じられた。野田村側が対決を有利に展開するために山手米を隠したことが発覚したものとされる。

ひるわ山は寛文四年まで幕府の「預り山」であり、山手米五石三斗は「彦坂小形部御前帳」(天正一七)で定められ

三河ひるわ山論の展開（藤井）

たといわれる。その山手米を野田村が負担し、山廻も野田村民が務めたことから、野田村がひるわ山を保護・管理し、その反対給付として下草・松の下枝などを採取していた。

戸田尊次の時代（慶長六～一九）に、赤羽根村が「自分持山ニテ薪不自由ニ候、（中略）ひるわ山ノ落葉ヲ買申度と奉願候」と訴えたことにより、赤羽根村も札米三石二斗余を納め、ひるわ山で薪として使う松の落葉を採取することが許された。⁽²⁾ その札米は野田村が受け取り、野田村から幕府へ納められた。野田村はこの事実を隠すことにより、赤羽根村のひるわ山での利用権を否定しようとしたのであろう。結局、事実が判明し、野田村の庄屋と山廻は処罰され、野田村が図った「新子きり」すなわち開墾の停止は認められなかった。

寛文八年は、三宅氏入封から五年目である。そして、ひるわ山は三宅氏入封時に幕府「預り山」から田原藩領になった地域である。入封して五年経過し、ひるわ山の管理・利用に関する藩の方針・対応が明確にされてきたため、それをめぐり野田村・赤羽根村がそれぞれ自村に有利になるように訴訟を起こしたと考えられる。その結果は、庄屋・山廻の入牢という事態に至った、野田村に有利とはいえない。そこで、寛文一三年に再び山論となったのであろう。

二、寛文一三年の山論

寛文一三年の山論の経過について、まず概観する。山論は三月一四日⁽²⁾に野田村村役人九名が、参勤交代で江戸在府中の藩主に、ひるわ山について直訴するために、江戸へ出府したことに端を発する。この訴えが藩邸で受理されなかったため、野田村村役人は寺社奉行・老中への越訴により解決を図った。そして、六月四日の評定所への出頭を実現したが、そこにおいて、老中より国元での解決を命じられたため、六月一三日に帰国した。藩主の帰城をまって、八月二五日に田原藩の裁決が下された。野田村村役人はその裁決に承服しなかったため、七名の村役人が追放・家内欠所に処せられた。そこで、野田村民五〇名余が江戸に出府し、九月から一二月にわたり、老中・寺社奉行に越訴を繰り返した。その結果、翌延宝（九月に改元）二年二月、評定所において赤羽根村との対決が実現し、四月一二日に裁許が下されて、山論は終結した。

以下、寛文一三年の山論について、まず、野田村村役人が出訴に及んだ原因を、次に、二度にわたる野田村民の江戸における訴訟活動と訴願の内容を明らかにし、最後に、評定所における両村の主張と下された裁許を通してひるわ

山山論の特質を検討していくことにする。

(一)江戸出訴に至った原因

野田村役人による江戸出訴は、ひるわ山に赤羽根村民が大勢で押し込み松葉を伐採したことが直接のきっかけとなつて行われた。この赤羽根村民の行動が野田村に知らされたとき、野田村民は「惣百姓、十五名以上の者罷出、ぼうちを可仕」という報復の実力行使にしようとしたのである。野田村民が「ぼうち」をも辞さずという強硬な姿勢をとり、さらに村役人に江戸出訴を迫った背景には、

去年此かた、田原へも罷越、何之諍訟相叶候哉、よそ村の庄屋ハ山を取申たくみ仕候に、皆々ハ我が物を人にとらるゝ事、口惜く候、

という事情があつた。すなわち、前年秋以降起こしていた訴訟の不調が存在していたのである。それは次のとおりである。

④赤羽根村之者共様々之偽をたくみ申上候ニ付、去年秋より新畑を被仰付候ニ付、古来より野田山之義ニ御座候間、御とめ被下候へとも、数度御諍訟申上候、

⑤秋中より此かた、松葉落シ被仰付被下候得と、当二月まで御願ひ申上候得共、御取上ケ無御座、

すなわち④赤羽根村によるひるわ山地内での新畑開発の中止と⑤ひるわ山における松葉の伐採の許可の二点である。

史苑（第五一卷第一号）

まず、④について、赤羽根村の史料には「当御代ニも新畠切ひらき申候事紛無御座候、但シ子ノ年迄度々切候へ共、何共かまい不申候へ共、丑ノ年より俄ニかまい申候」⁽²²⁾とあり、丑ノ年寛文一三年になり急に野田村が干渉するようになったとしている。野田村にとって見逃せない開発の進行だつたと思われる。開発は、山自体の縮小、つまり下草・松葉をはじめとする採取物の減少を意味し、ひいては山の消滅にもつながるものである。さらに、問題となるのは、この開発が「新畑被仰付候」とあることから、赤羽根村の独断ではなく、田原藩の承認あるいは意向を受けて行われたものと考えられる点である。つまり、赤羽根村の新畑開発は田原藩の政策の一環として行われたため、野田村は異議を申し立て、訴訟に至ったものであるが、この開発中止を求める訴えは受理されることはありえなかつたと考えられる。

次に⑤の松葉の伐採であるが、田原藩では松葉の伐採は山稼ぎとして浮役の賦課の対象となり、伐採に際しては藩の許可が必要とされたため、野田村もひるわ山での松葉の伐採の許可を求めたのである。田原藩は最初「他村相添きらせ可申」という条件付きの許可を出した。これに対して野田村は「古来より他村之者耆人も入申事無御座候」と反論した。この反論に対する田原藩の解答が、三月一四日の赤

羽根村による松葉の伐採であったと考えられる。つまり、田原藩は野田村ではなく、赤羽根村に松葉の伐採の許可を与えたことである。これは、野田村の慣習の既得権を侵害するものであり、前年秋より行っていた訴訟の失敗を意味する。

このように、野田村の訴訟は④・⑤ともに、野田村の意に沿わない結果となった。この状況を打開するため、また「ばううち」に代わる対抗手段として、野田村村役人による江戸出訴が決定されたと考えられる。

江戸出訴は名主・年寄九名によって行われたが、そのさい名主をはじめとする村役人は「田原江御断を立」と、田原藩に届け出てから出訴することを主張した。しかし、村役人以外の野田村民は「去年此かた田原へも罷越、何之諍訟相叶候哉」と述べ、藩に届けずに出訴するように村役人に迫った。そして、村役人「壹人ニ四五人つく付遣り申候」と、半ば強制的に江戸出訴を実現させた。このような両者の主張の違いは、村役人という立場に立つ者と立たない者の判断の下し方の違いとともに、ひるわ山に依存する度合の違いによるところが大きいと考えられる。これは野田村の村落構造につながる問題であるが、この点については別稿に期したい。

(二) 一回目の江戸出訴

最初の江戸出訴は、三月一日から六月五日まで約三ヶ月間に及ぶ。この間の野田村民の行動を順を追って見ていき、彼らの訴願の内容と目的を明らかにしていく。

野田村村役人は江戸到着後、小石川にある田原藩江戸屋敷に出頭し、次のように訴えた。

御国本にても埒明不申候故、是迄下り申候、此上、殿様御登り被遊候内まで相待候へと被仰候が、如何様ニ被仰付候も相知れ不申、其内ニハ赤羽根村之百姓山ニ皆ニ仕義ニ候間、是非〳〵赤羽根之者共被召寄、被仰付被下候、

つまり、国元において訴訟が取り上げられないために江戸に下ったというのである。当時藩主三宅康勝は参勤交代で江戸在府中であつたから、この段階では野田村村役人は藩主への直訴が目的であり、その訴願は、江戸における赤羽根村との対決である。

これに対して、田原藩は国元での解決を指示し、国元へ帰るように命じたが、野田村村役人は従わず、訴訟を繰り返した。そのため、田原藩は、赤羽根村ではなく、郡奉行市川十郎右衛門をはじめ四名の地方役人を江戸に呼び、野田村村役人と対決させた。しかし、それでも十分な審理がなされなかったため、その後も赤羽根村との対決を求め

て訴訟を繰り返したが取り上げられなかった。

そこで、野田村村役人は、

御屋敷様ニ而埒明不申候ハキ、無是非御公儀様江御諍
訟可申上候間、御そい状被仰付被下候、

と訴えた。すなわち、田原藩が訴訟を取り上げないのなら、幕府へ訴え出るというのである。この段階で野田村の訴訟先が田原藩から幕府に変わったのである。このとき、野田村村役人は田原藩に「御そい状」、つまり添翰を求めていることから、合法的な手続きにより幕府への訴訟を行おうとしていたと考えられる。結果的には添翰は出されなまま、野田村村役人は寺社奉行の屋敷へ行き「御帳」に訴訟の趣旨を書き記すという行動をとった。すなわち、寺社奉行への訴の提起を行ったのである。田原藩の「萬留書」⁽²⁵⁾に書き写されている野田村の寺社奉行所宛の訴状の日付が四月二日になっていることから、提訴は三月下旬から四月初旬にかけて行われたと思われる。当時の寺社奉行は小笠原長頼・戸田忠昌・本多忠利の三人である。この寺社奉行への訴の提起に対し、田原藩は村役人の妻子四〇名余を捕え、四月二四日から五月二四日まで入牢を命じている。

さらに、野田村村役人は四月二五日に寺社奉行小笠原長頼に駕籠訴を行い、「赤羽根百姓御召寄、古来之通ニ被仰付被下候」と訴えた。ここで越訴という非常手段を用いて、

赤羽根村との対決を求めたのである。これ以降、四月二七日・五月九日の寺社奉行の内寄合において、また繰り返し行った駕籠訴により、野田村村役人は赤羽根村との対決を訴えたが、これに対する寺社奉行の対応は、次にあげる本多忠利のものに端的に表れている。

地頭方能登守殿江使者遣し申候間、一同ニ罷越、御地頭ニ而埒明申事ニ候間、諍訟可申上候、此方ニ而ハ取上ケ不申、

要するに、野田村の訴訟を不受理とし、田原藩への訴訟を命じるものである。田原藩に対しても「指紙」を出したり、使者を出すなどして、野田村の訴訟を取り上げるよう指示している。これを受けて、五月九日に野田村村役人は本多忠利の使者に付き添われて田原藩邸へ出頭したが、田原藩は彼らを捕縛し、斬首とする決定を下した。この決定は越訴に対する処罰である。斬首は寺社奉行小笠原長頼の「其百姓共ハ死罪ニ被仰付者共にては無御座候、能とがを御吟味被成候而被仰付候へ」との指示により延期となった。

村役人捕縛の報を受けた野田村から九〇名が江戸に出府し、五月一七日に老中への駕籠訴を行い、「御地頭様江御諍訟申上候へ共、名主・年寄共御屋敷へ御取込被遊、籠舎ニ被仰付候ニ付、国本ノ百姓共御訴訟ニ下リ申」と訴えた。これにより、野田村の訴えが村役人の一存ではなく多数の

三河ひるわ山山論の展開（藤井）

百姓によって支えられていたことがわかる。この駕籠訴により、五月二日評定所へ出頭するよう命じられた。

これに対して、田原藩は村役人を赦免するとともに、芥川是水をたて調停にあたらせ、野田村民の評定所出頭を阻止しようとした。野田村民はこの調停を受け入れ、評定所への出頭を中止した。このことから野田村民が求めているのは、評定所の裁許ではなく、田原藩に訴訟を受理させることだったと考えられる。

しかし、この調停は失敗に終わり、野田村民は六月二日に再び老中へ駕籠訴を行い、その結果、六月四日に評定所に出頭した。そこで野田村民は「御地頭ニて埒明不申候間、乍憚御公儀様江御訴訟申上候」と越訴に至った理由を述べ、「相手赤羽根百姓被召寄対決被仰付、古来之通ニ被仰付被下候」と赤羽根村との対決を求めたのである。

この野田村の訴えに対して、老中稲葉正則は「御地頭ニ而埒明申候様ニ申遣候間、国本へ罷帰候得」と命じた。これは、田原藩に再審理を命じることで、国元において解決させようとしたものである。

野田村民は、国元の役人、江戸藩邸の役人、寺社奉行と訴訟の対象を変え、訴訟の手段を、村役人による駕籠訴から、総勢九〇名に及ぶ駕籠訴と、強化させることにより、田原藩に再審理をさせることに成功したのである。これに

より、六月一日に野田村民は江戸を出発し国元へ帰った。藩主三宅康勝の帰城後、八月二五日に田原城内において、野田村村役人は次のように申し渡された。

ひるわ山わうき山ニ申付候間、松葉葉落シハ野田村江古来之通申付候、新畑之義ハ赤羽根江申付候、其通リ相守申候得、

このなかの「うき山」は請山・受山という字があてられ、その意味は「徳川時代各藩に行はれた林制の一で、藩の所有する山林を村民に貸与する」ことである。この裁決で、田原藩はひるわ山を藩の直轄地と定めたうえで、野田村には松葉の伐採を既得権として認めたのである。また、「新畑之義ハ赤羽根江申付候」とあることから、新畑開発を赤羽根村へ命じている。現在ある新畑はもちろん、今後の開発も赤羽根村に行わせるという、藩の政策を明示したものである。

田原藩は石高一万二〇〇〇石の小藩であることから、新田開発による年貢増収は戸田氏以来の重要な政策である。

表1からわかるように、寛文四年の三宅氏入封以来、新田高は急増しており、三宅氏が開発に積極的だったことは明らかである。ひるわ山が地積六六町、石高にして六〇〇石余を期待できる山であったため、田原藩は赤羽根村を支持したものである。寛文四年までひるわ山が幕府領であ

ったことを考えると、この裁決により、田原藩は赤羽根村に新たな権利としてひるわ山の開発を認めたといえることができる。

野田村はひるわ山を常に「松山」ととらえ、松葉の伐採や下草の採取など「山」として利用していた。赤羽根村による開発の推進は山の減少・消滅につながるものであり、この裁決は承認しがたいものである。

表 1

年 代	年 数	新 田 高	1 年当たりの新田高
慶長 6 ~ 寛文 4 (1601 ~ 1664)	63	石 2,878.251	石 44.973
~ 貞享元 (1684)	20	2,164.736	108.237
~ 宝永 7 (1710)	26	2,383.660	91.679
計	109	7,426.647	68.134

註 「地方秘録」(天保 3 年・華山文庫蔵) より作成

のであった。そこで、野田村役人は異議を申し立てたため、即日、その場から追放・家内欠所に処せられた。これを受けて二回目の江戸出訴が行われたのである。

(三) 二回目の江戸出訴

今回の江戸出訴は、前回の出訴のさい中心となった村役人九名のうち、七名が追放、江戸三州所払いに処せられた

ため、五〇名余の野田村「小百姓」によって行われた。彼らは九月八日から十二月一〇日まで三カ月間に及ぶ訴訟活動を繰り広げた。

この間、野田村民がとった手段は二つある。一つは、「御籠ニ付御訴訟申上候」とある駕籠訴。もう一つは「山城守様へ相詰候得共、御門江御いれ不被成候」、あるいは「皆々罷出御訴訟申上候」と記されている手段である。「御門江御いれ不被成」とあることや、各屋敷の番衆が対応していることから、駆込訴を用いたと考えられる。

今回の江戸出訴において、日付が明記されているものだけでなく、駕籠訴が三二回、駆込訴は二二回である。その内訳は表 2 のとおりである。前回に比べて、老中に対する駕籠訴は目立って多くなっている。戸田忠昌に対する駕籠訴・駆込訴ともに極端に少ないのは、戸田忠昌が田原藩の前藩主ということから、野田村の訴訟への関与を避けたことによる。この表以外にも「其外日々御訴訟廻り申候」とあることから、かなり執拗な訴訟活動が行われたと推察される。

このような訴訟活動を通して、野田村民が訴えていることは、次の点に集約される。

古来より野田村山ニ紛無御座候所を、浮山ニ被仰出、赤羽根村へ新畑被仰付候而ハ、野田村ハ潰レ申候間、御

表 2

三河ひるわ山山論の展開（藤井）

相手 日付	形態	老 中						寺 社 奉 行						計	
		稲葉正則		土屋数直		久世広之		本多忠利		小笠原頼長		戸田忠昌			
		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
9. 8								○		○					2
16			○				○								2
23		○				○								2	
24				○			○							1	1
29						●		●		●				1	2
10. 2				○										1	
5		●				●								2	
6				●				○		○				1	2
14		●		○		●								3	
16							●	○		○				2	1
17												○		1	
19						●								1	
24		○												1	
11. 7		○		○		○				○				3	1
8						○								1	
9		●	○					○		○				3	1
10			●				●								2
12				○		○								1	1
14				○		○		○		○		○		2	4
16				○		○	○							1	2
19				○										1	
22			●												1
23						●								1	
27								●						1	
12. 2										●				1	
4						○								1	
小 計		6	4	7	3	12	5	3	4	3	5	1	1	32	22
合 計		10		10		17		7		8		2		54	

- 註 (1) 「ひるわ山出入覚書」より作成
 (2) 形態……A：駕籠訴 B：駈込訴
 (3) ●印：訴状ないし訴願の内容明記

慈悲ニ赤羽根百姓被召寄、対決被仰付候、

要するに野田村民は①ひるわ山を請山にされ、赤羽根村に新畑を命じられては野田村は潰れてしまう、②赤羽根村民との江戸での対決の実現、の二点を訴えたのである。野田村が行った駕籠訴・駈込訴は合計五四回。このうち訴状ないし訴訟の要旨が記されているのは一七回である。この一七回すべてに②の項目は記されており、①の項目についても九回記されている。これにより、野田村が赤羽根村との江戸における対決（これは評定所での対決を意味する）を切に求めていたことがわかる。

この訴願のうち、「浮山ニ被仰出、赤羽根村へ新畑被仰付候」という部分（①）は、八月二五日に下された田原藩の裁決と全く同じである。つまり、野田村は田原藩の裁決では潰れてしまうので、評定所において赤羽根村と対決したいと訴えたのである。この訴願の意図は、評定所の裁許を得ることで、田原藩の裁決を無効にしようとするものである。野田村民は、相手は赤羽根村と明言しているが、実際は田原藩を相手にしているのと変わらない。従って、老中・寺社奉行が野田村の訴訟を受理することは、幕府が私領の裁判に関与することになるばかりか、領主を相手とする領民の訴えを取り上げることになる。

そのため、老中・寺社奉行は野田村の訴訟を受理せず、

史苑（第五一卷第一号）

野田村民を「地頭之申所を用ひ不申にくき者共」と叱りつけ、番衆を使って追い散らしたり、また野田村民四名を捕え入牢を命じたり、様々な手段を用いて野田村民を国元へ帰らせようとした。しかし、野田村民は「御訴訟不相叶、籠舎之者かへハ不及申ニ、八拾人之者共籠舎仕候共、又ハ品川ニ而一々はり付に被成候」とも言い放ち、あくまでも評定所における赤羽根村との対決を求めた。

このような野田村民の執拗な訴訟活動が功を奏し、翌年一月に評定所において赤羽根村と対決することが約束されたのである。ここで、野田村の訴訟が受理されるに至った過程を幕府の裁判手続きに基づいて検討すること、さらに、老中をはじめとする幕閣と野田村民の質疑応答における、双方の意識の分析も問題となるが、これらの点については別稿に期したい。

（四）評定所における両村の主張

ここでは、野田村と赤羽根村が評定所に提出した証拠と、審問の場における答弁を通して、両村の主張を明らかにしていく。

評定所において野田村を訴訟方、赤羽根村を相手方とする審問は、「出入覚書」に記されているだけでも、二月六日、一三日、二二日、三月四日の四回行われた。この四回の審問の場に、野田村が証拠として提出したのは、「彦坂小形部

御前帳」と「御請取并御下目録」と「御下ゑず」の三点である。一方、赤羽根村は「彦坂小形部御前帳」、「金能寺寄進状」、四冊の検地帳、絵図である。これらの証拠は「出入覚書」に挙げられているだけで、実物は両村ともに残されていないため、「金能寺寄進状」以外はその内容を詳細に知ることはできない。そこで、審問の過程でなされたこれらの証拠についての説明および反論等を通して、両村の主張を明らかにしたい。

まず、野田村・赤羽根村ともに提出しているのは絵図である。おそらく絵図に野田ひるわ山あるいは赤羽根ひるわ山と記されていたことから、提出したものと思われる。「出入覚書」では、赤羽根村の絵図は野田村のものより新しいとされて却けられた。

同じく両村ともに提出しているのは「彦坂小形部御前帳」である。これは、天正一七年（一五八九）に渥美郡で彦坂小刑部元正の竿により作成された、検地帳のことである。この「御前帳」を提出し、野田村は五石三斗の、赤羽根村は三石二斗七升九合の山手米を、それぞれ上納してきたと主張し、ひるわ山を自村持山としているのである。「出入覚書」では、野田村の「御前帳」には判が押してあり、野田村の五石三斗のほうが「古證文」の数字と一致することから、野田村の「御前帳」は有力な証拠とされた。赤羽根

村のものは新しいうえに判もないことから、役に立たないとの判断が下された。なお、野田村は山手米上納の証拠として「御請取并御下目録」も提出したが、これは本来領主側にあるべき文書という理由から、証拠としては採用されなかった。

赤羽根村が証拠とした「金能寺寄進状」は、大永六年（一五二六）の戸田左近尉政光の寄進状のことである。この寄進状に「将又御林之伐木薪ハひるわ山ニ而御とらせ可有之」とあることから、赤羽根村の持山であると主張したのである。これに対して野田村は「金能寺地中之夏ニ而ひるわ山之証拠ニハ成申間敷候」と反論した。つまり、金能寺で用いる材木・薪をひるわ山でとることが許されたからといって、ひるわ山が赤羽根村山であるということにはならない、といっているのである。この反論に対する赤羽根村の返答、また評定所の判断などの記載は「出入覚書」にはない。

このほかに、赤羽根村が証拠として提出したものに検地帳がある。提出理由は、赤羽根村の訴状では次のように述べられている。

ひるわ山内地内、御前帳本高ニ相結び、御年貢上納仕候而、任先規ニ戸田因幡守様御同名伊賀守様御代迄、四十年前より四度之新田新畠切り、則御帳ニ慥ニ御座候、

先御代ニハ不及申ニ、当御代ニも新畠切り、代々之御帳面ニ而年貢上納仕候義、実正紛無御座候、野田村之田地とてハ毫畝毫歩も無御座候、

このなかで「御前帳本高」とあるのは朱印高のことで、

「四度之新田新畠切り、則御帳ニ儘ニ御座候」とあるのは、戸田氏時代に行われた寛永七年・同二年・慶安三年・明暦二年の、四回の検地のさい作成された検地帳のことと思われる。田原藩では明暦二年までに開発された田畑を「先規開発」、「先規改出」と称しているが、それに相当するものである。また「当御代ニも新畠切り、代々之御帳面」というのは、三宅氏になってから行われた改出検地により作られたものである。つまり、赤羽根村は本高八五一石余および先規開発二九三石余の田畑がひるわ山にあることと、ひるわ山において開発を行ってきたことを検地帳で証明し、ひるわ山は赤羽根村山であると主張したのである。

この赤羽根村の主張に対して、野田村は次のように反論している。

ひるわ原江少シ入くみ、赤羽根村之田地御座候、是ハ古来ル赤羽根之地つゞきにて、赤羽根高ニむすび申候地ニ而、古来ル赤羽根村之田地は野田ひるわ山とハ各別わけ立テ候、

つまり、野田村は、ひるわ原に赤羽根村の田地が入り組ん

で存在することを認めたくえで、それらの田地と「野田ひるわ山」とは峻別されていたと反論したのである。さらに「四度之帳面と申義ハ、是ハあれらが地内之高ニ而御座候、野田ひるわ山ニハ毫せ毫歩も無御座候」と補足し、赤羽根村の検地帳に載せられているのは赤羽根村の田畑であつて、ひるわ山を赤羽根村山とする証拠にはならず、また、野田ひるわ山には赤羽根村の田畑はない、というのである。

このような両村の主張により、ひるわ山といっても野田村と赤羽根村が同じ場所を指しているわけではないことがわかる。元来、ひるわ山と「野田ひるわ山」は、多少の交錯はあったものの、区別されていたと考えられる。現在でも、ひるわ山ないしひるわ原は、赤羽根町大字赤羽根の耕地の大半と田原町大字野田の一部（明治二二年の土地整理実測字限地図の渥美郡野田村比留輪に該当）を含む広い地域を指している。このことから、赤羽根村はこの総称としてのひるわ山の内に田畑があることを利用し、野田村が一村で利用していた「野田ひるわ山」をも含めた、ひるわ山すべてを赤羽根村持山と主張した、ということができる。

「野田ひるわ山」をどのように利用しようとしたかという点についてであるが、野田村が「下草ハ不及申、木松葉を伐りかせぎ、野田村中身命をやしない、助ニ仕」る松山と、その利用を具体的にしているのに対して、赤羽根村の

三河ひるわ山論の展開（藤井）

ほうはその利用の方法が具体的にでない。赤羽根村の訴状に「戸田因幡守様御同名伊賀守様御代迄四度之新田畠切ひらき、則御帳面ニも御座候」、さらに「当御代ニも新畠切ひらき申候」とあることから、開発可能な土地、開発を推進するための用地とみなしていたと考えられる。

要するに、赤羽根村はひるわ山を「田」としてとらえていたからこそ、検地帳を証拠として提出し、さらに「野田ひるわ山」での新畑開発を図ったため、野田村と衝突したのである。

一方、野田村はひるわ山をどのようにとらえ利用していたか。具体的にみていこう。野田村は証文・絵図類とは性質の異なる証拠を提示した。

六十年以前、乍憚、権現様於此ひるわ山ニ鹿狩リ被為遊候時、（中略）鹿見へ不申候間、大木を伐セ可申と御上意御座候ニ付、翌年亥子丑三年之内ニ、野田村惣郷罷出、大木を伐リ取、其後大坂開ぢん之後ニ、未申兩年ニ大木伐リ取、野田村たすけニ仕、是が正敷証拠ニ而御座候、

この「権現様」鹿狩りは、寛文一三年から六三年前の成年にあたる慶長一五年（一六一〇）二月に二代將軍秀忠が田原附近で大規模な鹿狩りを行っていることから、この鹿狩りを指すと考えられる。その鹿狩りのさい、鹿が見えな

いという理由で大木の伐採を命じられたが、それを受けて、野田村惣郷で慶長一六〇一八年にかけて伐採したこと。さらに大坂夏の陣後の未申年、すなわち元和五・六年にも伐採した。この二点、つまり、慶長一五年以降五度ひるわ山において大木を伐採し、野田村の助けとしたという事実を証拠として挙げているのである。

また、寛文二年（一六六二）にも、赤羽根村の「ひるわ山松木しけりニ付、赤羽根村田日そんな仕候間、松ハ水すひ申と申候而、野田村御申付、御きらせ被下候」という訴えにより、ひるわ山の松を伐採した。そのときも、赤羽根村の「田ふち」、田地の周りの松にもかかわらず、赤羽根村ではなく、野田村が伐採したというのである。要するに、野田村は、ひるわ山での松の伐採を野田村一村で行ったという、既成事実を証拠として挙げたのである。寛文一〇年、神戸七ヶ村が黒川山の松を伐採したさい、田原藩へ五〇両上納した。この例からみても、ひるわ山の松の伐採は野田村に相当の収入をもたらしたと考えられる。

野田村は、松の伐採のほか、ひるわ山を次のように利用していた。

下草かり取、貳千七百石之田地田畑之肥やししないニ仕、馬之^{飼料}かい領・薪等ニ至迄仕候而、松葉落シ致、惣百姓之身命をやしない、介ニ仕候、

すなわち、野田村は、ひるわ山において肥料および馬の飼料に使う下草や日常使用する薪を採取し、さらに「松葉落シ」をして「惣百姓之身命」を養い助けにしたと述べた。この「松葉落シ」に伴う収入であるが、天和三年（一六八三）の田原藩の「萬留帳」によると、野田村の松葉の出来高は五万束、このときの相場は両に八三四束替えであるから、六三両余となり、内三二両余を田原藩に納め、残りは野田村の収入となったとある。このような収入となったからこそ、野田村は一連の訴訟活動において、ひるわ山を常に「下草ハ不及申、木松葉を伐り取」る松山ととらえたのである。さらに「日そん水そん西風」による不作のときには、ひるわ山にて稼ぎ、「野田村百姓」の助けにした、「田地ニハかゝがたき山」とまでいつている。以上のことから、ひるわ山は野田村に収入をもたらす絶好の山稼ぎの場として重要だったということができる。

評定所の審問の場において、野田村はひるわ山における松葉・松木の伐採および下草・薪などの採取は、慣習的既得権として野田村に属するとし、赤羽根村は古田・新田畑など耕地の存在と開発を行ってきた事実により、ひるわ山は赤羽根村の山として帰属権を主張したのである。このような両村の主張の違いは、ひるわ山の利用形態の相違によるものであり、ひるわ山山論を刈敷肥料としての下草刈り

の利権をめぐる争論とは位置付けられない、と考えられる。
(5) 評定所の裁許

延宝二年四月一二日に評定所の裁許が下された。その裁許状は、野田村にも赤羽根村にも現存しないが、赤羽根村鈴木家には次のような文書がある。

申渡覚

- 一、參州田原領ひるわ山、野田村より松之下枝取候儀、如前々当地頭申付之条、弥可為其通事、
- 一、ひるわ原之儀、只今迄有之畑者其假指置之、向後新開発仕間敷之旨、地頭申付之条、是又可為其通事、
- 一、地頭三宅能登守申付之趣、野田村之百姓令違背之間、頭取七人之内、清右衛門事能登守ニ被下、其外六人追放被仰付候事、

寅四月十二日

この文書の性格は明確ではないが、「申渡覚」という題名から、三宅康勝への申渡書の写と考えられる。内容は①ひるわ山における松の下枝の伐採は野田村が行う、②ひるわ原にある畑はそのまま指し置くが、今後の開発は禁止する、③野田村百姓は藩主の命に違背したので、頭取七名のうち清右衛門は藩主へ引き渡し（四月二二日野田村彦田にて獄門）、残り六名は追放に処す、の三点である。

この「申渡覚」を評定所の裁許とする理由は、鈴木家の

三河ひるわ山山論の展開（藤井）

宝永二年の文書に「延宝貳年寅四月御公義様御評定之砌、彼原ニ新開発御停止被仰出候」、「ひるわ山原共、松葉枝落等之儀者、是又、延宝貳年御評定ニ被 仰出候通、野田村江伐採山持可仕」とあり、ひるわ原の開発の禁止とひるわ山原における野田村の松葉・下枝の伐採権の承認の二点を「御公義様御評定」により決められたとしている点が、「申渡覚」の内容と一致することによる。

「申渡覚」で重要な点は、ひるわ山とひるわ原が区別されていることである。この文書中ではひるわ山は松山と認識されていることから、野田村民が駕籠訴などの越訴および評定所の審問の場で訴えた「野田ひるわ山」に該当し、ひるわ原は畑と開発可能な原野が交錯した地域ととらえられていた。つまり、野田村の主張がいられ、ひるわ山とひるわ原を峻別したうえで、改めて野田村の松葉・下枝の伐採の権利を認めた裁許となっている。

さらに、「赤羽根村へ新畑被仰付候而ハ野田惣郷ひとつぶれ申候」という野田村の訴えが聞き届けられ、ひるわ原の新畑開発は禁止され、それが明文化された。野田村のほぼ一年にわたる訴訟は、村の指導者一四名（うち一名は死罪）と六〇〇両という莫大な費用と引き換えに、勝訴となったのである。

評定所の裁許は、田原藩の下した「ひるわ山わうき山ニ

申付候間、松葉葉落シハ野田村江古来之通申付候、新畑之義ハ赤羽根江申付候」という裁決を覆したものである。田原藩は水田・畑の増加が年貢増収につながるとし、ひるわ山で新畑開発を進める赤羽根村を支持したため、このような裁決を下したと考えられる。それに対して、幕府は野田村を支持し、ひるわ山における新畑開発を禁止した。野田村の松葉の伐採権を認めた結果である。この松葉が野田村に現金収入をもたらしたことを考えるとき、この裁許と田原藩の開発推進策との間に大きな隔たりがあることがわかる。両者の農政の方針の違いが、このような対応の相違となつて表れたものと考ええる。寛文延宝期の幕府の農政との関連については別稿に期したい。

また、裁許のなかで野田村百姓のうち頭取七名に対する処罰が下されているが、この処罰を田原藩ではなく、幕府が決定したことは注目に値する。このようなことが一般的なことなのか、田原藩と幕府の関係や幕府の裁判制度との関連などの検討を通して、今後明らかにしたい。

おわりに

以上みてきたように、ひるわ山山論は、赤羽根村によるひるわ山の開発の着手・推進に端を発した。赤羽根村の開

筭に對し、ひるわ山消滅の危機感を持った野田村の越訴により行われた、評定所の審問の場で、野田村はひるわ山の利用權を証明する証拠を提示し、赤羽根村はひるわ山に耕地があることにより、ひるわ山を自村持山と主張した。このような両村の主張の違いは、ひるわ山の利用形態、言い換えれば両村におけるひるわ山の位置付けが違ふことによる。野田村は、ひるわ山を松葉の伐採および肥料・飼料・薪の採取の場、すなわち「山」として利用していた。赤羽根村にとってひるわ山は、採草地というより開發可能な土地としてより重要だった。つまり、野田村と赤羽根村はひるわ山の採草權をめぐる對立したのではなく、両村の利用形態が異なつたため山論に至つた、ということができる。

このひるわ山山論は、従来の山論研究で明らかにされてきた、近世農民の再生産を維持するための土地生産性の維持・上昇に必要な刈敷肥料・稈の採草源としての山野をめぐる秣場争論とは異なる一面を持っている。その一面とは松葉である。

三河湾沿岸に点在する塩田、井戸側・肥甕など日用雑器を生産する常滑の存在を考えると、松葉はそれらの燃料として重要な意味を持つ。すなわち、商品としての松葉である。田原藩では、松葉の伐採は山稼ぎとして浮役の対象であつたことから、野田村にとつても、田原藩にとつても、

松葉の伐採は重要な収入源だつたということが出来る。藩財政に占める松葉の収入の割合など田原藩における松葉の位置付けとともに、三河湾をめぐる海上輸送に支えられた商品としての松葉を、具体的に明らかにすることを今後の課題としたい。

註

- (1) 『田原町史』中卷九一頁
- (2) 前掲書九五頁
- (3) 前掲書六六〇六九頁
- (4) 前掲書六六〇六八頁。浮役は小物成の一種で、浮動して定まらない雑税の意味。知行渡しするとき、浮役は高に結ばれないのが原則であつたが(『国史大辞典』)、田原藩の場合、三三五石三斗三升二合の浮役が朱印高に結ばれている。その浮役は網役・山手米・塩浜である。朱印高にこのような浮役が含まれることは珍しく、田原藩の特殊性を表すものである。田原藩の朱印高に浮役が結ばれた理由を、田原藩の財政および渥美半島の諸村が置かれた自然条件との関連のもとに、明らかにする必要がある。
- (5) 『田原町史』中卷二四三頁
- (6) ひるわ山は、日留王・飛留輪・飛留王・飛流王・日留輪などの字が当てられるが、本稿ではすべて仮名書きにした。
- (7) 『赤羽根町史』三〇四頁
- (8) 『田原町史』中卷九二七頁では、寛文一〇年から山論は起きたとされているが、赤羽根村の庄屋を務めた鈴木家の文書に

三河ひるわ山山論の展開（藤井）

は、寛文八年と年号が明記されたものがある。また「ひるわ山出入覚書」にも「六年跡申ノ正月」に赤羽根村との間に山論があったという記載があり、この年は寛文八年戊申に該当する。以上のことから、ひるわ山山論は寛文八年から始まったとした。

- (9) 『田原町史』中巻九二七頁
- (10) 野田区蔵文書。「ひるわ山出入覚書」には加藤七右衛門の署名がある。野田村にはこのほかに、ひるわ山山論の記録がもう一冊あることから、「出入覚書」は宝暦期に当時の庄屋であった加藤七右衛門が筆写したものと推定される。本稿は「出入覚書」による。宝暦期に山論の記録が筆写された背景、および二冊の記録の史料批判は、今後の課題としたい。
- (11) 鈴木甲子郎氏所蔵（愛知県渥美郡赤羽根町大字赤羽根）
- (12) 鈴木家文書（「乍恐ひるわ山証拠書言上仕候」・寛文八年戊申ノ正月二五日）
- (13) 「甲号図」（明治四四年調整・鈴木家文書）
- (14) 『田原藩日記』第一巻三一頁
- (15) 鈴木家文書（「奉指上乍恐御訴訟之事」・寛文九年酉ノ七月日）
- (16) 鈴木家文書（「乍恐御訴訟状指上申候」・寛文九年酉ノ七月）
- (17) 『日本国語大辞典』には、群馬県勢多郡・伊豆三宅島坪田・長野県の方言として「あらこ 新しく開墾した所」とある。
- (18) 鈴木家文書（「指上申手形之支」・寛文九年酉之九月）
- (19) 『渥美郡史』四四五頁
- (20) 「歳代覚書」（渥美郡田原町野田・鵜飼家蔵）。この文書は、野田村の鵜飼金五郎が同村庄屋加藤権助の所蔵文書を抜き書

きした、覚え書。安永二年（一七七三）成立。

- (21) 「出入覚書」では三月一三日であるが、田原藩の「萬留書」（『田原藩日記』第一巻三五頁）に「三月十四日ニ発足仕」、また「出入覚書」でも訴訟の過程で「三月十四日ニ大勢もやういたし、ひるわ山江押込」と記されていることから、三月一四日とした。
- (22) 鈴木家文書（「乍恐口書ヲ以申上候」）
- (23) 『田原町史』中巻九六頁。松葉は、松の枯落葉のことではなく、松の下枝のこと。松をまっすぐ育てるために行われる枝下しのさいに伐採された下枝、および松葉が密生した小枝のことを指す。
- (24) 郡奉行市川十郎右衛門、村方御役中神源右衛門、代官沢井重兵衛、棚瀬庄八郎（役職は不明）の四人。役職は「家中由緒書」（華山文庫蔵）による。
- (25) 幕府で裁判機能を持っていたのは、老中・若年寄・評定所・三奉行・道中奉行であるが、関八州以外の私領の者よりの訴は寺社奉行の管轄である（石井良助『日本法制史概要』）ため、野田村民は寺社奉行へ訴えたのである。
- (26) 『田原藩日記』第一巻三五頁
- (27) 芥川是水は医師。「家中由緒書」によると「十人扶持・江戸新規召抱」とある。田原藩は、芥川是水を通して、藩主三宅康勝の従兄弟である松平玄蕃頭定時の「手形」を与えることで、野田村民を納得させようとした。
- (28) 『日本経済史辞典』
- (29) 『田原町史』中巻一二三頁
- (30) 「田原近郷聞書」（『豊橋市史』五巻一三一～一三三頁）。鈴

木家にも写がある。

- (31) 鈴木家文書（「乍恐口書以申上候」・延宝二年寅ノ二月）
- (32) 「地方秘録」（華山文庫蔵）、「村々田畑畝高之帳」（野田区蔵）
- (33) 「地方秘録」
- (34) 註（21）と同じ。
- (35) 『田原町史』中巻六二五頁、「田原近郷聞書」（前掲書一二七～一二八頁）
- (36) 「萬覚書」（『田原藩日記』第一卷一五頁）。神戸七ヶ村は谷ノ口、新美、志田、赤松、青津、市場、漆田の七ヶ村。
- (37) 『田原藩日記』第一卷一四九頁
- (38) 註（23）と同じ。
- (39) 「歳代覚書」

〔付記〕

本稿は一九七九年度に立教大学に提出した修士論文の一部を書き改めたものである。鈴木好枝氏、岡目作司氏には史料掲覧にさいしご協力いただき、また諸先生方・先輩方には長年にわたり励ましご指導いただきました。紙面を借りまして厚くお礼申し上げます。

（一九七九年度立教大学史学専攻修士課程修了・

東海市史執筆委員）